

「討論に寄せられた質問について」

山田 裕二

シンポジウムの当日の「討論」の際には多くの質問を頂戴いたしました。時間にも限りがあり十分には消化ができませんでした。頂いた24の質問をすべて並べますと以下のようなものです。順序は整理をいたしました。文章は頂いたものそのままです。参加していただいた方々のそれぞれの大学環境の中で、どのように自校教育を展開していくかという具体的な関心の高さが窺われます。

(1) 教員、職員と自校史教育

- ・自校教育への事務職員の関わり方の可能性について示されたい。
- ・教員、職員、に対する自校教育について、学生に対するそれとの違い等について示されたい。
- ・大学で働く教職員に対しても自校史教育の必要性を感じているが、どのように行うのが良いか、具体例やご意見がありましたらご教示いただければ幸いです。

(2) 大学アーカイブスと自校(史)教育

- ・今回の事例はいずれも大学アーカイブスが主体となっているが、大学アーカイブスにとって自校教育は行わなければならないことなのか。自校教育と大学アーカイブスの関係について。
- ・大学アーカイブスがない大学ではど

か。

- ・自校教育の担当者の確保の工夫、アーカイブスの存続の2点について、学内世論作り等。
- ・大学史の展示施設について、授業の一環としての利用実践、利用の可能性についてお聞かせ下さい。
- ・自校教育としての授業の枠組みが中心でしたが、それ以外の方法としてどのような方法があるのか、大学図書館や資料センターの活用方法などについて教えてほしいと思います。
- ・自校史という名称はダメというご意見があったが、自校史であろうが自学史(自大学史)であろうが、それはどうでもよいことのように思いますが、いかがでしょうか？また、自校史という名称にしてもポイントは「校」ではなくて「自」にあるように思います。さらに、自校史としておくと、大学だけではなく、小学校、中学、高校すべての教育機関の自分史を含むことが出来、自校史教育そのものの幅が拡がり、多様な教育機関の間で問題や情報を共有することが可能となります。とりわけ、中学や高校をもち、いわゆる一貫教育を行っている立教やその他の私学の大学にとっても、自校史と呼ぶ方が適切といってよいのではないのでしょうか。
- ・自校教育と自校史教育の関係はどうかあるべきなのか。自校史教育は自校教育の一部として位置づけられるのか。両者の関係を理論的(学問的)に追求する作業はどの程度まで進ん

でいるのか。

- ・ 自校教育で論文を書く方が増えましょう。英語表記を教えてください。

(3) 授業への動機付け、シラバス、授業内容、目標、成績評価、質の保証

- ・ 必修とする自校教育が増えています。動機づけの工夫はありますか？
- ・ 各科目のシラバスに、当該科目を受講しての学生の「到達目標」を書かれていることと思います。どのようなことを到達目標として掲げておられますか。
- ・ 科目の授業方法ですが、教員による講義が主流なのでしょうか？ 又は、学生にグループ学習をさせたり、ディスカッションを行うなど「学生参加型授業（という形態）」をしておられることはありますか？ もしあればその時の学生の反応や（教員が狙いとしている）理解度はいかがでしょうか？
- ・ 「自校教育」と言いながら内容が歴史に偏っている。
- ・ 4年間、自校の授業を担当しておりますが、1990年代以降の一連の大学改革（特にカリキュラム）について説明をしようと思いつつ、うまくできず困っております。このテーマについて授業でどのように扱っているか教えてほしいと思います。
- ・ 自校教育で取り上げる大学の歴史について：自校教育の中でその歴史を取り上げることは学生にとって大きなインパクトがあると思うのですが、歴史以外に特に学生が集中して聴講した内容があればお聞かせください。
- ・ 教育の成果、質の保証が求められて

います。自校教育のせい、質の保証をどこに求めればよいでしょう。

- ・ 成績評価の基準は何でしょう。
- ・ 本日の事例報告は、いずれも旧帝国大学とそれに準ずる国立大学、および歴史と伝統のある名門私立大学のものであったが、これら以外の大学（戦後に新制大学として発足した国立大学や高度成長期以降に設立された私立大学など）の事例はどのようなものであろう。

(4) 学生のアイデンティティ

- ・ 学生は大学へのアイデンティティで悩んでいない（自分のアイデンティティは悩んでいるが、、、）と言われたが、それは京大や東北大の学生なので、大学への帰属意識の醸成が必要ないのであって、不本意入学の多い大学もかなりあります。そういう意味では、大学によっては自分の大学に誇りを持てるようになるための自校教育は必要であると思います。いかがでしょうか。
- ・ 東北大学以外の国立大学においても、学生が私学と違い自校のアイデンティティに迷っていないという傾向はあるのでしょうか。
- ・ 自身のアイデンティティについて悩む現代の学生に対し、自校教育を通じて何か示唆を与えられるのか。
- ・ 自校教育は歴史を学ぶ手段か、学生のアイデンティティに寄与するためのものなのか、についてご意見をお願いいたします。自校教育は「だれ」がおこなうのか、「到達点・ゴール」は何かを伺いたい。

これらの質問について、独断的な整理で恐縮ですが、内容はおおよそ以下の4項目に集約されるように思います。

- (1) 自校教育への事務職員の関わりの可能性や、教員・職員・高校生など学生以外に対する「自校教育」について
- (2) 授業以外での自校教育、グループ学習、大学文書館、資料センターの活用方法など、授業以外での自校教育について、また自校史以外の自校教育について
- (3) 大学アーカイブスと自校史教育の関係、大学アーカイブス設置や存続のための学内世論の形成について
- (4) 不本意入学などが多い大学、また歴史の浅い私立や地方国公立大学での自校教育のあり方について

シンポジウムで登壇して頂いた先生方には、あくまでの御自身の実践例の報告という形でのお話をお願いします。他大学の事柄について積極的にコメントをする立場にいらっしゃらないことを承知の上で、上に集約いたしました4項目について、自由なご意見、コメント、サジェスチョンなどをお願いいたしました。御回答を頂いた各先生方には重ねて御礼を申し挙げるとともに、「討論の続き」として各先生方から頂いたコメントを掲載させていただきたいと存じます。また、羽田先生より「アイデンティティの形成としての自校史教育と歴史教育としての自校史教育—討論に触発されて—」のタイトルで別に校を頂きましたので、この「討論に寄せられた質問について」の前に掲載をさせていただいております。

【質問項目へ各先生方からのコメント】

- (1) 自校教育への事務職員の関わりの可能性や、教員・職員・高校生など学生以外に対する「自校教育」について

折田先生：九大では、以前から散発的に新人職員研修に際して、「九州大学の歴史」の概論をお話しておりましたが、平成20(2008)年4月には新採用職員研修オリエンテーリングの一環として、「大学文書館で歴史に触れよう」を行いました。来年度も既に本年同様、「九大の歴史に触れる」というテーマで一コマの講義を行う予定です。高校生等に対しては、「出前講義」や学内見学に来学した小・中学生、市民の方々に専任教員が案内・説明・講義等を実施し、また同窓生・父兄に対しても、ホームカミングや創立記念日、同窓会等で講演・展示会を開催しています。特に同窓生・父兄への講演等は、「事例報告」でも述べましたように、創立百周年を2年後に控えていますので需要も多く、大学文書館としては積極的に対応しているところです。

別府先生：(1) 事務職員の関わりの可能性については、講座の出席やなかには専門的な知識を持っている人もいるので、そういう人には授業を持ってもらっている。
(2) 学生以外に対する「自大学史教育」についてはリバティ・アカデミーで実施している。

山口先生：この質問(1)の後半部分の趣旨を「自校教育を一般市

民に対して行うことについて」という意味で理解するならば、教養教育の観点から考察するという今回のシンポジウムのテーマから外れた質問であると思います。しかし、単位認定を前提とする教養教育としてではなく、公開講座的な位置づけで「自校教育」の内容が一般市民などに提供されることは地域貢献あるいは大学広報活動として十分に成り立つように思います。

豊田先生：この点については、いずれも立教大学の「自校史教育」においては実現しておりませんので、参考となるようなコメントをするのは、正直難しいです。

ただし、個人的には、事務職員が教育に関わるというのは、非常におもしろいのではないかと思いますし、さまざまな可能性があると思います。例えば、比較的近い時期の問題については、歴史的に評価することが難しい場合もあります。そうした問題については、当事者である事務職員の方に直接話しをしていただく、というような方法も考えられるのではないのでしょうか。

また、学生以外に対する「自校教育」も、学生に対するそれと同様の効果が期待できるのではないのでしょうか。

(山田) 自校教育またはその他の授業に、事務の方が授業をする主体として積極

的に関わることはいくつかの大学ですでに実践されているようですし、私個人としても賛成するところです。自校史教育ではなく、まさに自校教育の部分での貢献も大きいと思います。立教大学での例を挙げますと、全学共通カリキュラムの総合科目として「仕事と人生」というキャリア関連科目にキャリアセンターの職員が参加し、「信じる こと 生きる こと」という科目ではチャプレン（牧師）や学生相談所のカウンセラーも授業をする側として参加しています。意欲と問題意識を持つ方に参加してもらうことは、職員の大学への関わり方の意識に対しても影響をもつのではないかと思います。ただ、受講する学生、特に1、2年生にとっては「授業をしている人は皆先生」という受け止め方をしているようで、大学側の授業を運営する姿勢としてはなかなか伝わらないようです。

大学がその運営姿勢、教育に対する姿勢の変化を求められつつある情勢の中、教員・職員に対してその姿勢を「解説・説明・教育すること」はその必要性を増してきているように感じます。その内容は「自校教育」のみならず、「大学の社会での役割」、「カリキュラムや個々の授業の運営姿勢・方針」などについても必要ではないでしょうか。大学の活性化に向けてやらねばならないことはたくさんありますが、同時に通常業務も増えつつある中で、どれだけのことをするかは普遍的な課題でもあるように感じています。立教大学では、新任の教員に対しては、まだ若干の「お話」がある程度です。

(2) 授業以外での自校教育、グループ学習、大学文書館、資料センターの活用方法など、授業以外での自校教育について、また自校史以外の自校教育について

折田先生：大学文書館が職員・同窓生等に向けていくつかの活動を行っていることは、上記(1)でお答えした通りです。また、自校史教育以外の自校教育については、「事例報告」で少しふれましたように「伊都キャンパスを科学する」(総合科目)の中で、「九州大学史と新キャンパス」を分担しています。

別府先生：博物館の中に明治大学史のコーナーを設置し、誰でも無料でみられるようにしています。

西山先生：大学アーカイヴズ(大学文書館)は、親組織の大学の組織運営・変遷に関わる資料を集めることを中心的な業務としていますから、「自校史教育」の素材を提供する場としては最適であると言えます。また、自校の歴史に関する展示などを開催している場合もありますので、教育の場としても有効であると考えます。

山口先生：単位認定を前提とする教養教育としてではなく、公開講座的な位置づけで「自校教育」の内容が一般市民などに提供されることは地域貢献あるいは大学広報活動として十分に成り立つように思います。

豊田先生：立教学院史資料センターにおいては、他の授業に情報や資料を提供しているとい

う事例があります。例えば、英語を担当されている先生が、自身の授業における教材開発のために、池袋キャンパスのレンガ校舎や校舎にからまるツタに関する調査で利用されています。また、ある授業では、グループ学習の課題の中に、立教大学の歴史にかかわるようなテーマが含まれていたことがあったため、その課題に取り組んだ学生が、センターを利用しているようなことがあります。

資料センター自体が提供する授業以外にも、その資源を活用する方法は、上記のように、いろいろと考えられるのではないのでしょうか。

(山田) 東北大や京大のように「自校の歴史に関する展示」を積極的に公開している大学も多いと思います。名古屋大学でも大学文書資料室ではありませんが、青色発光ダイオードの開発に大きく貢献のあった赤崎勇先生の記念館が常設展示をしています。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館などもあり、国土交通省も「大学観光資源」としてデータベース(<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/daigaku/>、<http://www.weblio.jp/category/culture/dgksi> 2009年3月現在)を作成しているようですから、「自校教育」という視点以上に大学に蓄積されているものを公開していく作業は重要度を増して、大学内で感じている以上に世の中では関心を持って見ているのかもしれない。立教大学ではキャンパスの狭隘さもあ

り常設展示には至らない状況です。大学文書館や資料センターが授業ま

たはそれ以外で教育に関わること、そして山口先生がご指摘されているとおり、「公開講座」などを展開する活動も大切になってきますし、十分に実現可能な範囲にあることなのではないかと思えます。

今回のシンポジウムの射程の範囲ではありませんが、「自校教育」に関して議論をする際には「正課」の授業のみならず「正課外」の

- ・就職に関する活動、キャリア教育を通しての「就職部」「キャリアセンター」
- ・図書館
- ・体育会やサークル活動、奨学金、「学生部」

などはまさに「自校教育」の視点から中心的な役割を日常的に大きく担っていることは忘れてはいけなと自戒しています。

(3) 大学アーカイブスと自校史教育の関係、大学アーカイブス設置や存続のための学内世論の形成について

折田先生：九大では「九州大学の歴史」「大学とはなにか」の両科目とも、大学アーカイブス（現大学文書館、発足当時は大学史料室）が中心となって始めましたので、最初からアーカイブスと自校史教育の関係は密接でした。また、以下の点は前回の講演でもふれさせていただきましたが、自校史研究は当然歴史研究ですから、まずはきちんとした「史料」に基づいた研究、そして授業が行われなくてはなりません。その「史料」を一番大量にかつ系統的に収集・保存して

いるところが大学アーカイブスです。私は自校「史」教育の実施主体としては大学アーカイブスが一番相応しいと思っていますが、それは以上のような考え方によるものです。

次に「大学アーカイブス設置や存続のための学内世論の形成について」ですが、九大は実はこの点に多くの力を割いてきたように思います。潰されたら何にもなりませんから（何よりも大切な史資料＝文化遺産が散逸・廃棄されてしまう）。教職員のポストや予算、建物（部屋）の確保等には、常に細心の注意を払いながら活動してきたつもりです。それからマスコミへの対応（コメント等）、学内広報誌への投稿等も勿論重要ですが、「事例報告」でも申しましたように、やはり教科書『大学とはなにか―九州大学に学ぶ人々へ』の製作は、色々な面で学内世論の形成に役立ちました。研究会を通じて執筆者同士の意思疎通がはかられましたし、当時の総長は「刊行によせて」を書かれ、学内外に向けて宣伝もして貰いました。その意味で九大の場合、新しい教科書作りが今後の課題ですが、大学文書館内に「百年史編集室」が設置されたことは大きな励みになります。何と言いましても、『年史』が自校史教育・自校教育の最も基本的な「教材」だと思ふからです。

別府先生：大切なことであるので、機会あるごとに学内誌などで周知させるようにしています。Mスタイルや明治大学広報などに書くのもその一環と思っています。

山口先生：基本的に、自校史教育（あるいは自校教育）は、大学アーカイヴス機能をもつ組織こそが最も適切に実施またはコーディネートできる教養科目であると考えています。大学アーカイヴスの設置や存続のために有効な手だては、事例報告の際にも述べたように、アーカイヴス活動に対する「直接感染」的な機会を提供することだと考えています。

豊田先生：自校史教育を展開するには、大学アーカイヴズの存在は不可欠だと思います。他の研究分野とは違い、自校史に関する資料や研究成果は、大学自身が意図的に取り組まなければ、なかなか進展するものでもないでしょう。したがって、自校史教育の質も、こうした取り組みによって、大きく左右されると思われます。

とはいえ、アーカイヴズセクションを立ち上げ、維持していくということは、現在の日本の大学の現状ではなかなか厳しいのも事実だと思います。そのため、立教学院史資料センターにおいては、アーカイヴズの根幹の業務である、資料の

収集・整理・保存と平行して、できるだけ学内外にその存在意義と活動を認知・理解してもらえよう、研究業務にも力を入れ、可能な限りその成果を発表するよう取り組んでいます。

(山田) いろいろな大学での事例を伺っていて、「大学アーカイヴス」や「資料センター」が設置されているならば、そこが「自校教育」について大きな役割を果たすだけの原動力の一つとなることは確かであるように思います。ただ、いろいろな方からの質問にもありますように「自校教育」イコール「自校史教育」ではありません。立教大学でも自校史教育の初めは寺崎先生の「大学論を読む」という科目であって、その科目からどのように自校教育へと発展していったかは、寺崎先生の御自身の体験も交えて大変に興味深い記述があります（『大学改革—その先を読む』寺崎昌男 著 東信堂 2007年 62頁）。アーカイヴスが大学になくとも、問題意識を持っている教員がいらっしゃれば、その方の立場から、大学の今について語り始めれば、それがどのような解であっても自校教育となっていくのではないのでしょうか。

(4) 不本意入学などが多い大学、また歴史の浅い私立や地方国公立大学での自校教育のあり方について

別府先生：本学は、歴史は古いのですが、不本意入学はあります。自分の大学の長所を、事実をもって教授し、心の居場所があるように対応しています。

西山先生：質問4に関しては、当日の

報告あるいは授業探訪の中でも少し述べていますように、私自身は「自校」の歴史に固執した授業が絶対に必要であるとは考えません。もう少し範囲を広く取って、それぞれの時代の大学生たちがどのように生きたのか、その時日本の大学はどのようなであったのか、を示す形で授業を展開されればいかがでしょうか。

山口先生：理想論的なコメントになることを恐れずに述べると、「不本意入学者」に対してこそ自校教育を通じて自らが所属する大学の現状とその経緯（歴史）を伝えることが求められると思います。その際、当該大学の歴史の長短や設置形態（国公立の別や所在地）はそれほど重要な条件ではないと考えます。その意味では、シンポジウム当日に紹介された事例のみならず、その他多数の事例から取り組みやすい自校教育のスタイルを選択して「試行錯誤」を重ねることが最も有効な手だてであると考えます。

豊田先生：自校史教育は、不本意入学などが多いほど、その効果を発揮するのではないのでしょうか。また、歴史が浅い場合などは、シンポジウム中でも言及があったように、歴史にこだわる必要はないのでしょうか。それぞれの大学が持っている資源にあわせた、自校教育の展開

がなされるべきではないでしょうか。

(山田) 不本意入学に対応するには多角的な視点と「少し長めの時間」が必要であるように感じています。「自校教育」の実施も対応の一つではあると思いますが、それは対応の一側面であって、「教員との人間関係」「同級生、先輩（後輩）との関係」が普段の生活でどのように形成されていくかも大切であるように思います。質問(2)の部分でのことの繰り返しにもなりますが、大学生活での「正課外」の部分の役割を看過してはいけないであると考えています。

今回のシンポジウムでは、自校（史）教育の実践校として前回2005年のシンポジウムとの関連性も保ちながら立教の他、九州大学、明治大学、京都大学、名古屋大学、東北大学の各先生方に御経験からの事例報告という形でお話をお願いいたしました。いろいろな方からの質問の中に、「自分の大学と環境が違うが、その違う環境の中ではどのようにすればよいのか？」との趣旨の質問を頂きました。この質問に正面から答えることは難しそうです。授業はその教室にいる学生に対して、その眼の前の学生に向けて行われるのですから、今そこにある環境や文化に積極的に関わって適応していかなければなりません。そのような授業の事例報告ですから、「この大学ではそのような形の授業となるのかあ」という様に理解して頂く方が良いのではないかと思います。同じ内容を伝えようとしても、環境が異なればまた違った形の授業となるのではないのでしょうか。授業と教育に一般論はないようです。既に自校（史）教育を行っているところでも、常に新たな教材と試みを探しています。今回のシンポジウムに参加して頂いた全員

の方の求めに応えることは到底できませんでしたが、今後、新たな授業展開の事例などがあれば、情報を交換させていただく機会を是非とも持たせていただきたいと思いますと考えております。

やまだ ゆうじ
(本学理学部専任講師・
全カリ総合教育科目担当部会長)